



い と う



海援隊旗(二曳きの旗)

<https://www.ryoma-kinenkan.jp>

前程 ZENTEI BANRI 万里

「武家社会における名前」展

会期：令和8年4月25日（土）～6月21日（日）

「名前」の在り方やそれを巡る慣習は、長い歴史の中で形作られ、時代とともに変化してきた。現代の名づけでも、各界で活躍した人物や親世代の価値観に由来する漢字が用いられることが多い。「名前」に注目することで、その時代・社会がどのようなものであったのかを、より深く理解することができる。

現代日本のような「苗字・氏・十個人名(名)」という名前の在り方は、明治時代以降に新たに形成されたものであり、江戸時代以前の名前を巡る様相は現代と大きく異なっていた。本企画展では、龍馬や土佐藩主・藩士に関する様々な資料を、「名前」という視点から深掘りすることで、江戸時代を生きた武士たちの名前の実相と武家社会の在り方に迫っていく。

主従制は武家社会を成り立たせる原理であり、教科書で習う「御恩と奉公」やそれに基づく「参勤交代」はこれを象徴する仕組みであった。そして武士の名前にも主従制原理が大きく作用していた。例えば、土佐山内家二代忠義は、將軍徳川秀忠から「松平」苗字と「忠」の一字を拝領し、以後の当主は公式な場において「松平」苗字を名乗ることになる。苗字や一字

の下賜は日本史上で広く行われ、上位者にとっては家臣統制の手段であり、下位者にとっては非常に名誉なことで、忠誠心を高めることに繋がる。まさに「御恩と奉公」システムの中に「名前」が位置づけられていた。



山内忠義宛徳川秀忠判物
[高知県立高知城歴史博物館所蔵]

前近代社会を象徴するもう一つの原理は世襲制である。親から子へ代々「家」が受け継がれていく様は將軍家であろうと、下級藩士家であろうと同様であった。苗字は代々受け継がれるものであるし、諱にも「通字」という、特定の一字を継承する慣習があった。例えば、坂本家では才谷屋三代八郎兵衛直益(はじめ直本)以来、「直」を通字としており、龍馬直陰(のちに直柔)もそれを受け継いでいた。「直」という字は、直益の儒学や古典への造詣の深さを物語っており、そうした気風は坂本家に代々受け継が

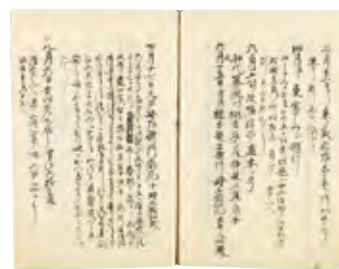
企画展記念講演会についてのお知らせ

- 日時：6月20日（土）13:30～15:00
- 講師：尾脇秀和氏（神戸大学経済経営研究所研究員、花園大学・佛教大学非常勤講師）
- 演題：「近世武士たちの名前—近世後期の人名常識—（仮）」

本企画展の主要な参考文献の一つである、『氏名の誕生－江戸時代の名前はなぜ消えたのか』（筑摩書房、2021年）の著者尾脇秀和氏をお招きします。皆様のご参加をお待ちしております。

企画展では、「本姓」「苗字」「諱」「通称」といった前近代の「名前」を構成する要素を分かりやすく説明するとともに、三十点あまりの資料から、「名前」の実相や社会的機能を具体的に紹介していく。展示を通して、武士という存在や武家社会について理解を深めていただければ幸いである。

安岡達仁



卑家月書内之部第一(順水日記)
[高知県立図書館所蔵(才谷屋文書)]

れていたのではないだろうか。

企画展

「郷土坂本家の秘蔵」展を振り返って

龍馬の兄・権平の家系である郷土坂本家より、約七七〇点に及ぶ資料が当館へ寄託された。寄託の手続きが完了したのは昨年年度であり、本展がお披露目展としての役割を果たした。

寄託資料は書画・書簡・写真・銅像・つづら・日用品など多岐にわたる。勝海舟・西郷隆盛・土方久元などの有名人物の書や、高知出身の画家・公文菊僊が描いた幕末の志士たちの絵など、貴重な資料が豊富に含まれていたことから、本展では掛軸類を中心に三〇点ほどを展示した。

本展のメインとなったのは掛軸類であるが、「土佐勤王志士遺墨展覧会出品目録控」という、龍馬を研究していく上で重要な資料も展示した。

昭和四年（一九二九）、東京都赤坂区にあった青山会館において、土佐勤王志士遺墨展覧会が開催された。この展覧会には郷土坂本家からも資料が出品されており、その出品の控えとして作成さ

れたのが上記の目録である。作成者は郷土坂本家七代目当主・坂本弥太郎である。弥太郎は明治三四年（一九〇一）に郷土坂本家に婿養子として入り、当主として数々の展覧会に所蔵品を出品してきた。マメな性格をしていたのか、目録には資料の情報が詳細に記されている。載せられた情報の例としては、大正二年（一九一三）に起きた北海道釧路の火災によって類焼した龍馬佩用の刀（吉行・和泉守兼定）を昭和三年（一九二八）に富田秋霜が研ぎ上げたこと、千葉周作より受け取った皆伝目録も火災により焼失したことなどが挙げられる。子孫でしか知り得ない非常に有益な情報である。

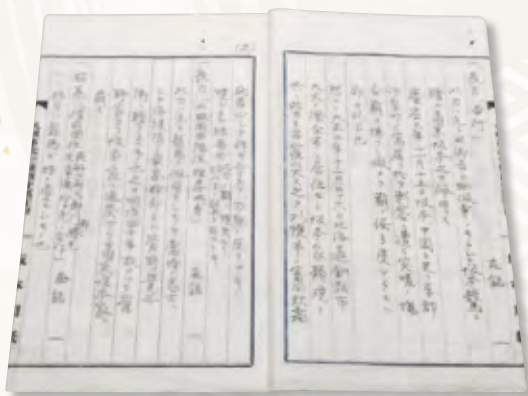
土佐勤王志士遺墨展覧会の出品から一年後の昭和五年（一九三〇）、弥太郎は郷土坂本家が所蔵していた資料を恩賜京都博物館（現・京都国立博物館）へ寄贈した。寄贈品についても目録化しており、それによると、龍馬の遺墨を始め、三徳・刀などが寄贈されたこ

とが分かる。なお、寄贈された資料のほとんどが、平成十一年（一九九九）に国指定重要文化財となっている。

また、本展のキービジュアルとしては、弥太郎が所有していたトランクを使用した。当初、寄託された資料群は、トランクを始め、「坂本」と書かれたつづらに入られて当館へ運ばれて来た。そのため、当館への寄託の始まりの資料の一つとして、チラシ・ポスター・小冊子の表紙に載せることとした。リーフレットもトランクの柄にしており、来館者の方にトランクを開いてもらうことで、到着したばかりの資料を初めて確認していただくような気分になっていただきたという思いを込めた。

本展で展示することが出来なかった資料の中にも、貴重な資料は多く存在する。郷土坂本家の資料の魅力は、まだまだ秘蔵されている。

小部 さくら



土佐勤王志士遺墨展覧会（坂本家所蔵 当館寄託）



展示室の様子

館の教育普及事業

副館長の廣瀬です。昨年
7月号で私の故郷は榑原町に
あり、週に一度は帰省している
ことを記させていただきました。

またまた故郷の話で恐縮で
す。この2月中旬の帰省中の夕
食時に、町の行政無線放送から
「坂本龍馬記念館：学芸課長：
講演会：」という放送が流れて
きました。この講演会は、数
年前に榑原町に移住された当館の
運営協議会長が町に提案して
「雲の上の図書館」を会場にし
て、当館の学芸課長をお招きい
ただき、同会長と二人の対談形
式の講演会（写真参照）を開催
することになったとお聞きして
います。私は、この講演会の企
画・開催に何も関わっていない
のですが、当館の重鎮ともいえ
る二人が関わる講演会が我が故
郷で開催されるようになったこ
とに、館に勤めている私として
は、誇らしさを感じながら脱藩
の道の山々に響き渡る放送を聞
いていました。

副館長の廣瀬です。昨年
7月号で私の故郷は榑原町に
あり、週に一度は帰省している
ことを記させていただきました。

またまた故郷の話で恐縮で
す。この2月中旬の帰省中の夕
食時に、町の行政無線放送から
「坂本龍馬記念館：学芸課長：
講演会：」という放送が流れて
きました。この講演会は、数
年前に榑原町に移住された当館の
運営協議会長が町に提案して
「雲の上の図書館」を会場にし
て、当館の学芸課長をお招きい
ただき、同会長と二人の対談形
式の講演会（写真参照）を開催
することになったとお聞きして
います。私は、この講演会の企
画・開催に何も関わっていない
のですが、当館の重鎮ともいえ
る二人が関わる講演会が我が故
郷で開催されるようになったこ
とに、館に勤めている私として
は、誇らしさを感じながら脱藩
の道の山々に響き渡る放送を聞
いていました。

私は、この講演会には、ど
なたが来られているか、何人の参
加者か、榑原の子ども達は参加
して興味を持って聞いてくれて
いるか、大人の参加者の反応は
どうか、…などの状況を見に行
きたかったのですが、当日は当
館での主に子ども達を対象とし
た「第3回 歴史の面白さを学
ぼう！」（チラシ参照）の開催
日と重なり行くことはできませ
んでした。館のイベントの方で
は、子ども達や保護者の方など
の多くの方にご来館いただき、
子ども達が楽しくイベントに参
加している姿や興味深々に学芸
員の話の聞いていた姿を見るこ
とができました。

このように、当館では、館を
飛び出し地域に向いての講演
会や学校にお邪魔しての出前授
業、また、館にお越しいただい
ての展示解説・講演会や楽しい
子供向けのイベントなど
の教育普及事業の活
動を行っています。学
芸員を始めとする職員
は、来館者や参加者の
皆さんが学び、遊び、
満足度が高まるよう工
夫しながら、熱意を
持つて積極的に取り組

んでおり、私はその姿に感服し
ています。

今後もこうした活動を創意
工夫しながら継続することによ
り、子ども達を始めとした多く
の皆さんが、当館を学びの場と
してご利用していただくことを
願っています。



講演会の様子（雲の上の図書館提供）



チラシ（第3回 歴史の面白さを学ぼう！）

研究紀要のご紹介

当館では毎年、研究紀要を発行しています。
当館学芸員等の研究成果をまとめたもので、
最新号（第7号）は右記の構成となっております。
過去のものを含めてミュージアムショッ
プで販売しております。気になる論考がござ
いましたら、是非お買い求めください。

- ・「土佐藩主山内家官位考－官位に関する基礎的情報と豊資の少将昇進について－」
安岡達仁
- ・「文久期土佐藩の人事決定権に関する一考察－天誅展を通して－」
上村香乃
- ・「岡崎家文書翻刻 六 岡崎菊右衛門日記（安政五年十一月～六年八月）」
亀尾美香
- ・「特別展「河田小龍展」での普及事業の取り組みについて」
河村章代

新職員紹介



林 知佐

皆様はじめまして。令和8年1月から坂本龍馬記念館で勤務しております、林と
申します。歴史は苦手で、坂本龍馬の誕生日さえ覚えていなかった私ですが、当
館の常設展示室を一周するころには、すっかりその魅力に惹き込まれていました。
ユーモアに溢れ、誰にでも優しく、賢く、行動力のある龍馬さんは、まさに私の
理想像です。新しい環境で失敗も多くありますが、日々楽しみと感謝を忘れず精
進し、龍馬さんのような大きな心でお客様をお迎えしたいと思っています。皆様
どうぞよろしく願いいたします。エヘンエヘン

「第3回 歴史の面白さを学ぼう!」 イベントレポート

2月21日～23日は、イベント「第3回 歴史の面白さを学ぼう!」を開催しました。

こちらのイベントは、教科書だけでは分からない歴史上の出来事のウラガワを紹介したり、複製資料を近くで見、触れたりしていただくことで、歴史の面白さや、学ぶ楽しさを知っていただきたい!という想いで開催し、今年で3回目となりました。

「郷土坂本家の秘蔵展」の関連企画として行った「ミニ掛軸づくり」のワークショップでは、展示室に足を運んで、資料の中から気に入ったもののイラストを描いて、自分だけのオリジナル掛軸を作りました。子どもたちには難しいかもしれない、と少し心配していましたが、予定時間を過ぎてイラストを描く手がとまらず、たくさんの力作が出来上がりました。作品の一部は、新館と本館をつなぐ、2階の渡り廊下に展示しています。



学芸員体験コーナーでは、龍馬の手紙の複製資料や模造刀などをお客様に実際に触れていただきました。複製資料は、紙の質感や墨のかすれ具合、重さなど、真物にできるだけ近づけて制作しています。普段は展示ケース越しにご覧いただいている資料に実際に触れていただくことで、博物館を少しでも身近に感じていただけたのではないのでしょうか。巻物を実際に巻いてみる体験では、上下を同じ太さのまま巻いていく作業が意外と難しいという声も。「学芸員体験コーナー」は今後のイベントでも実施を予定していますので、興味のある方は是非次の機会にご参加ください。

今年度も企画展の関連イベントや、りょうま館の夏休み、龍馬月間など、シーズンイベントを予定しています。県内外たくさんの方に楽しんでいただけるように準備をしていますので、展示とあわせてイベント情報もチェックしていただけたら嬉しいです。企画展やイベントなどの年間スケジュールは、ミュージアムカレンダーをご覧ください！（当館HPでも公開しています）

竹田 綾



令和七年度企画展「半平太と京都」展 記念講演会

「近世中後期から幕末の諸藩と京都」

鳥取市歴史博物館学芸員・飯田市歴史研究所調査研究員 千葉 拓真 氏



千葉氏講演の様子

はじめに

江戸時代の京都は、平安京に淵源をもつ人口最大約三十万人の大都市で、江戸・大坂と並ぶ「三都」の一つだった。応仁の乱以降の戦乱で衰退し、公家は荘園収入の減少や領地の押領などで財政基盤が弱体化し、朝廷に対する室町幕府の後ろ盾も失われた。

その後、永禄十一年（一五六八）の織田信長上洛を契機に、京都は政治的重要性を回復する。秀吉期には聚楽第を中心とする大規模な都市改造が進み、町割を施した城下町的な近世都市へ変貌した。江戸期には二条城が築かれ、京都を含む畿内支配の拠点として機能し、初期には將軍・大御所が上洛して法令を発したり、將軍宣下を京都で受けたりした。

しかし寛永一五年（一六三八）の家光上洛以降、將軍の上洛は幕末まで途絶え、政治の中心は江戸へ移る。一方、幕末になると朝廷の存在感が相対的に高

まり、京都は再び全国政治の中心＝政治都市となるのである。

1 近世京都における諸藩の活動

近世京都で諸藩が活動する基盤となったのが京都屋敷である。江戸時代のはじめは約二六〇とされるが、多くが京都にも屋敷を構え、京都留守居を派遣した。宝永二年（一七〇五）刊の『京羽二重』には、一四三家の大名が京都屋敷を持ち、御用商人（呉服所）を設定していたと記されている。

屋敷の主要業務は、①呉服や高級調度品の調達、②朝廷から与えられる官位叙任関係書類の受領、③金融（特に一七世紀）、④縁戚関係にある公家・寺社との交際、⑤上級奥女中の雇用などである。さらに御用商人は、購買・貸付にとどまらず、京都で得た政治・儀礼・人物情報を藩へ提供する役割も担った。土佐藩では井筒屋が古い関係をもつ御用商人で、寛文年間（一六六〇～一七〇〇）に京都の公家と幕府中枢の対立情報を藩へ伝えた事例が確認できる。加賀藩では有職故実に関する知識の収集、鳥取藩では奥女中採用にかかる人物調査など、情報提供の内容は多様である。

屋敷の立地は、政治や儀礼を意識した御所・二条城近辺と、物資輸送の便がある高瀬川沿いに集中する傾向があり、土佐藩屋敷は河原町三条付近の高瀬川沿いに置かれた。屋敷絵図に「御買物方部屋」が記されることから、呉服・調度調達が屋敷機能の中核であったことがわかる。

ところで、大名と朝廷との関係を理解する鍵が官位制度である。官位（位階と官職）は律令制以来の体系だが、江戸時

代の武家にとっては実務官職ではなく、身分秩序を示す装置として機能した。

宝永六年（一七〇九）以降は全大名が官位を授与され、官職と位階によって上下関係が可視化された。尾張・紀伊徳川家は前田家は参議、伊達・島津両家は中将、鳥取池田家は少将、土佐山内家は基本的に従四位下・侍従まで進むことができた。ここで重要なのは、叙任の実質的決定権が幕府にあり、老中が江戸で方針を伝達し、京都所司代を通じて朝廷が口宣案などの文書を形式的に発給する点である。なお、通称としての「○○守」は所領支配と必ずしも一致せず、序列の指標にも直結しなかった。

次に各藩と京都との関係を個別的に概観したい。加賀藩は摂関家との縁戚関係を背景に公家へ助力金を支給し、有職方を設置して儀礼・朝廷情報の収集に努めた。また、御用商人が経営難に陥ると資金援助して維持するなど、京都との関係を重視した。鳥取藩は近世初期に京都で借財をしているが、金融の中心地としての意義は一七世紀後半には失われた。公家との関係拡大には消極的で、一七世紀には京都留守居と大坂留守居の兼務が常態化していた。ただし幕末には京都留守居が藩主側近として政治対応を担うように転化した。土佐藩と京都の関係では、京都遥拝という独特の儀式の存在と三条家との縁戚関係が注目される。歴代当主は、しばしば参勤交代途上に上洛し、三条家当主と面会していた。縁戚にあたる公家は天皇家との贈答、侍医叙任の便宜、儀礼に関する指導などを通じて山内家を支えた。

2 幕末維新期の

京都と諸藩

幕末の京都が政治都市化するなかで、近世以来の諸機構や縁戚関係が大名家による政治活動の足場となる。

ペリー来航後、幕府が大名に開国の是非を諮るなど統治は揺らぎ、条約締結をめぐる問題で朝廷の政治的存在感が増した。文久三年（一八六三）、将軍家茂が上洛し、孝明天皇が攘夷決行を命じたことは、従来の朝廷―幕府関係の逆転を象徴する。土佐藩では山内豊信（後の容堂）が、縁戚で武家伝奏を務めていた三条実万へ密使を派遣し、将軍継嗣問題や公武合体、将軍上洛などで意見交換を行っていた。しかし、こうした動きは安政の大獄で豊信が謹慎処分を受ける理由ともなった。

文久期に入っても土佐藩山内家は実万の子実美と関係を維持した。土佐藩は長州藩と接近し薩摩藩に対抗するが、こうした土佐藩の動きの中心にいたのが、藩主豊範に随行して京都入りを果たしていた武市半平太であっ

た。しかし、文久三年八月一八日の政変の結果、山内家は盟友長州藩と京都政局で活動する上でのキーパーソンであった三条実美を失うことになった。

公家との関係を足掛かりに、大名自身あるいは大名の名のもとに政治に参加するあり方が次第に変質していく。その結果、龍馬のような脱藩浪士の活動が活発化していくのであり、幕末の京都政局は新たな段階へと進んでいくのである。

おわりに

近世を通じて、京都において諸藩は様々な活動を行っていた。幕末の政治都市としての京都も、江戸時代の制度・慣行・縁戚関係の蓄積の上に成立した。ゆえに幕末の諸藩の京都活動を理解するには、江戸時代の京都の位置づけや公家と武家の関係、諸藩の活動についての理解が不可欠である。

令和七年度企画展

「柳内良一コレクション―維新史料の蒐集にかけた40年―」展

記念講演会

「歴史への興味―柳内良一コレクションの成り立ち―」

元京都国立博物館特任研究員 宮川 禎一氏

はじめに

柳内良一先生（以下は柳内氏）と私は、生前5回ほど面会の機会があり、京都国立博物館での幕末関連展示に錦絵等の資料を借用していたという関係にあった。

柳内氏は大阪市の北稜中学校の校長を務めておられ校長室には膨大な幕末資料が積み上げられていた記憶がある。その中から展示資料を借用していたのだ。柳内氏は自身で蒐集品に関して文章を書かれる方ではなかったが、自身のコレクションを博物館に貸し出すことで蒐集品を公開していたのである。

柳内氏が亡くなられたのち奥様から膨大な資料の受け入れ先について私に相談があり、展示や研究、借用の有用性を考慮して高知県立坂本龍馬記念館（以

下「記念館」への寄贈を勧めたことが記念館が所蔵するきっかけであり、今回の企画展示にもつながっている。

京都国立博物館での資料展示

2016年に京都国立博物館で「没後150年 坂本龍馬」展（以下「龍馬展」）を開催した。その際に柳内氏から『浪士文久報国記事』や複数の錦絵などを借用展示している。

柳内氏が錦絵や古文書をどのように収集したのかについての記録は無いようだ。氏は資料を収集していたが、幕末史研究の文章は書いていない。そのため資料の入手先や時期や価格といった情報を記録していない。加えて日記類も残されていない。

い。氏の収集過程を知るためには資料から読み取る外はない。人が物を集め、そのコレクションを公開したくなる感覚が生じた理由については不明だが、「人間の特質のひとつに蒐集がある」と考える。コレクターにはコレクターの心理があるのである。

古美術商

多田敏捷氏との関わり

古美術商に多田敏捷氏という有名な方がいらした。その多田氏からも柳内氏は資料を購入していた。その根拠は柳内氏が「土佐藩京都藩邸史料」の一部を所有していたことだ。

「土佐藩京都藩邸史料」は元々、滋賀県の古書市にでていた一括資料であった。この史料



宮川氏講演の様子

を最初に入手され所有していたのが多田氏であったことを私が多田氏から直接聞いている。のちにこの史料の大半は人を介して記念館が購入した。ただし、記念館が入手した土佐藩邸史料は全体の95%ほどだ。多田氏には柳内氏のような個人顧客があり、残りの5%は個別に販売された可能性が高い。今回の寄贈で柳内氏所有だった土佐藩邸史料の一部が母体へと戻ったことになる。さらに新選組永倉新八の「浪士文久報国記事」もまた柳内氏が多田氏から購入したものだ。

柳内先生と左翼活動

「時代が人間をつくる」

昭和20年代生まれの日本の若者、いわゆる団塊の世代の多くは左翼の影響を強く受けている。昭和26年生まれの中村氏もまた左翼思想を持った方であった。

2016年秋に京都国立博物館で開催した龍馬展には、現在の上皇・上皇后両陛下の御参観があったのだが、同展に柳内氏から多くの錦絵と「浪士文久報国記事」を借用していたために、行幸啓の旨を私から柳内氏に伝えたのである。その際の反応は

「私の集めた錦絵が『天覧に御す』ということですから」という表現で喜ばれていた。単純なマルクス主義者というわけではなく、そういう面も持ち合わせておられたのだ。

柳内氏の蒐集品に含まれているように「部落解放運動」に関わり、「大塩平八郎の乱」（天保八年・1837）という民衆蜂起事象に興味を示したのは、時代の影響によるものだろう。社会の矛盾や差別される人々の救済という点が歴史への興味となり、やがて幕末史へ

の興味に繋がっていったのだろう。

錦絵コレクション―画像で認識する「歴史」

柳内コレクションには江戸時代後期から明治時代にかけての優れた錦絵が多数存在し、保存状態も極めて良好だ。展示に役立つだろう。その中には月岡芳年の作品も存在する。月岡芳年は、近世末期から明治期にかけて歴史を題材とした錦絵を大量に制作している。彼の錦絵は日本人に「視覚的な意味での歴史」をもたらしている（大河ドラマの元祖か）。

「浪士文久報国記事」の池田屋事件の記述

柳内氏が「浪士文久報国記事」を入手した時期は不明だが、2015年以前には多田氏から購入していたようだ。なお、この「浪士文久報国記事」は永倉新八の直筆ではない。記念館が発行した「柳内良一コレクション展」小冊子によると、「土佐の郷土史家であった松村巖氏が何らかの方法で入手した筆写本である」とされている。

土佐藩京都藩邸史料の中に野老山吾吉郎という若い土佐藩士の記録がある。野老山は池田屋事件（元治元年六月）に巻き込

まれ、脱出後に死んだ人物である。土佐藩は事件直後に野老山に面接して供述調書を取っており、それが現在記念館に所蔵されている。池田屋事件を含む、歴史上の事件は複数視点で立体的に考える必要がある。「浪士文久報国記事」に加え、この調書も当時の記録として併せて重視すべきである。

伝源頼朝像は平宗盛か

話は美術史の問題に飛ぶが、神護寺に伝わった国宝の「伝源頼朝像」は足利直義であるとすると見解が近年示され、現在ではこれが定説化しつつある。しかし、私は「平宗盛の肖像画」だと主張したい。伝源頼朝像が伝平重盛像と左右対称に作成されていることは不可解だ。重盛と頼朝が、平治の乱以降に会った記録は無い。両者が顔を合わせて同時に肖像画にされることなど不可能だ。また、描かれた人物は束帯姿であり毛抜形太刀を佩用しているの、朝廷でしかるべき高位の官職についていたことが分かる。そこで、候補として挙げられるのが重盛の異母弟の平宗盛（1147―1185）である。安元三年（1177）の正月に平宗盛は権中納言ながら右近衛大将へと異例の昇進を果たしている。兄重盛は左近衛大

将だ。この年ならば重盛―宗盛兄弟が対幅で描かれるだろう。父の入道清盛が描かせたのではない。驕る平家だ。この平宗盛の昇進は、安元三年五・六月の「鹿ヶ谷事件」を引き起こすきっかけともなった。

実は鹿ヶ谷事件と池田屋事件には共通点がある。両事件とも「祇園祭の雑踏混乱に乗じて（平家の邸・御所や京都所司代に）放火しようとしていた」という発言が記述されているのだ。鹿ヶ谷事件の「放火計画」については『平家物語』には記載がなく、頼山陽の『日本外史』（19世紀始め）に記載されている。同書は幕末の日本に広く浸透していたから、『日本外史』の「鹿ヶ谷事件」の記述をもとに「池田屋事件」が発生したのではなからうか。150年前の人も、決して歴史を無視しているのではない。歴史本を読んで歴史を知り、その中で生きている。人間は歴史を学び「坂本龍馬や日本外史のように・・・」と、そういう所から行動を起こす生き物だからである。

海援隊「惣官」のこと

宮川 禎一

龍馬と海援隊に関する疑問がふたつある。

ひとつ目は土佐藩から海援隊と認められる以前のグループに名前がないことだ。「亀山社中」は後世の命名だ。当時は「社中」と呼ばれていたとされるが、自分の会社を「会社だ」と言うだろうか。社名の無い会社などまっ

たたく想像できない。

ふたつ目の疑問は坂本龍馬が海援隊の「隊長」ではなく「惣官」であることだ。龍馬は慶応三年十一月五日の「越行の記」で「福井で海援隊惣官と名乗った」と記している。

龍馬が「惣官」である理由が分からなかったが、日本史を遡れば有名な惣官がひとり居た。平清盛の三男で兄重盛亡きあと平家の総帥となった平宗盛（一一四七―八五）だ。平安時代末の「惣官」とは唐由来の官名で、丹波国とか播磨国とかの諸国の枠を越えた「軍事指揮権を持つ者」の意だ。しかし平宗盛は壇之浦で滅びた平家の代表者であり「日本一不名誉な者」という評価だ。龍馬が慶応三年四月に土佐藩から海援隊惣官を拝命した際に「平宗盛の故事を知っ

ていたか」は不明だ。

調べれば幕末の長州諸隊のトップは「惣官」だった。山田顕義がそうだ。総指揮官の意とされる。海援隊の「惣官」とは長州系の呼称だったらしい。

ここに「惣官」の話を書いた理由は龍馬ではなくて平宗盛の方だ。昨年の夏にあの神護寺の国宝『伝源頼朝像』は源頼朝でも足利直義でもなく、平重盛の異母弟の平宗盛ではないかと思いついたからだ。短く書くのは難しいので興味のある方は京都龍馬会の『近時新聞』六十二号の拙稿「伝源頼朝像の像主は平宗盛か」を御参照ください。「惣官」の大先輩が宗盛、後輩が龍馬だ。



写真は冷泉為恭による「源頼朝像」模写。十九世紀。東京国立博物館蔵。（コルベース <https://colbase.nich.go.jp> より）

2026年度 企画展のご案内

本年度は収蔵品展を含めて、計6回の企画展を予定しております。
皆様のご来館をお待ちしております。

企画展「武家社会における名前」展

令和8年4月25日(土)～6月21日(日)

企画展「幕末行列 ―光と影の世界―」展

7月4日(土)～8月31日(月)

収蔵品展Ⅰ「幕末維新期の文化」展

9月8日(火)～10月2日(金)

よさこい高知文化祭2026関連企画「土佐ゆかりの刀剣」展

10月10日(土)～12月6日(日)

収蔵品展Ⅱ「土佐藩京都藩邸史料を読み解く」展

12月14日(月)～令和9年2月13日(土)

企画展「幕末土佐の天保庄屋同盟」展

2月20日(土)～4月11日(日)

龍馬の手紙

30

ふと四方を見渡して思ふに、扱々世の中と云ものハかきがら計である。人間と云ものハ世の中のかきがらの中ニすんでおるものであるわい。おかしく。

(慶応3年4月初旬 坂本乙女宛)

龍馬の手紙には、よく独特の例え話が登場する。この時の龍馬の状況は、後藤象二郎の計らいにより、非公式ながら土佐藩へ復帰し、海援隊長に就任した直後になる。

江戸時代は、全国に270人前後の大名があり、各領地と人民を治めていた。現在、便宜上「土佐藩」などと呼んでいる「藩」という呼称は公式な言葉ではなく、「土佐守領分」などと呼ばれていた。

龍馬は、この「藩」を牡蠣殻に例え、多くの人は狭い藩の中だけで暮らしているため、狭い世界しか見ていないことを皮肉っている。藩を越えて日本全体、ましてや世界の中の日本を考えられる人が少なかったのだろう。

非公式ながら脱藩罪が赦免されたことで、長崎の土佐商会に出入りできるようになり、久しぶりに土佐藩士と話をしている、何か視野の狭さを感じるものがあつたのだろうか。

ちなみに、龍馬が思い描いている牡蠣殻とは、現代の飲食店で提供される大きな殻付き牡蠣のことではなく、海岸線の岩場やテトラポットなどに密集して自生している「地牡蠣」のことだろう。密集している様子が、諸藩の様子によく似ていると思つて例えたもので、世の中を俯瞰的に見ている龍馬の秀逸な例えである。



ジョン万出航の地・宇佐の地牡蠣

三浦 夏樹

龍馬館の あの日 あの時 あの時間



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。No.7

サッカーワールドカップに沸いた桂浜&坂本龍馬記念館

今年2026年は四年に一度のFIFA(サッカー)ワールドカップイヤーです。スポーツと言えば、記憶に新しいミラノ・コルティナ2026オリンピック/パラリンピックにWBC。スポーツの素晴らしさ、ときに厳しさを画面越しに強く感じさせられました。そして、続くスポーツの祭典として、まもなく開幕するFIFAワールドカップがあります。去る2014年(平成26年)6月、開幕したFIFAワールドカップ2014では桂浜公園に特設会場が設けられ、巨大モニターが中央に鎮座、高知県では初めての観戦イベント(日本代表初戦を観戦するパブリックビューイング)が開催されました。大勢のサッカーファンやサポーターで埋め尽くされた桂浜一帯はいつもとは全く違う空気感が漂っていたのを今でも覚えています。このイベントは高知県、高知市が全面協力のもと開催したもので、龍馬記念館にも協力要請がありました。来館者の皆さまをお出迎えしてくれているシェイクハンド龍馬像さんには日本代表の公式ユニフォームを着てもらい、

左右に公式ボール、優勝トロフィー(レプリカ)を飾り付け、大いに盛り上げてもらいました。この日は来館者の皆さまも龍馬さんのユニフォーム姿という珍しい光景に驚かれたり、喜ばれたり、各々記念写真を撮って帰られていました。あれから12年、日本代表も海外の選手と肩を並べられる人材が続々と育ち、ベスト8以上を目指すという目標が当たり前になった昨今。龍馬記念館も新館ができ、この12年で大きく変化しました。



日本代表と同じく他県の大きな博物館とも肩を並べられる存在になっていけるよう、精一杯尽力していきたい、そう思う今日この頃です。

上戸 有里

史料を読んでいると、日々暮らしている地域であつてもまだ知らない地名に遭遇することが多くあり、そのたびに分厚い辞書と現代の地図を手掛かりに場所を特定する作業を行っている。大体の位置がわかると、なるほど、この場所であるという出来事があつたのだなと、なんとなく想像することが出来るのだが、それ以上でも以下でもなく、あくまで2Dでの理解となつてしまう。この頃はストリートビューが普及しているため、該当地域の様子を目で見て把握することはある程度可能だが、現地点と方位を把握しながら地図上であちこち動き回るということは不可能なのである。となると、やはり実際に歩くほかはなく、こうして数年前から自称・史跡徒歩家となつた。

京都にいた頃は、御所や東山、祇園を歩き、それこそなんとなく当時の気風を感じるにとどまっていた。逢魔が時に東山にある御陵衛士の屯所跡辺りを歩くとなんとも不気味で、これは背後から袈裟斬りにされても仕方がないかもしれ

ないと思わせる様子である。

このような、自称・史跡徒歩家「風」な感想しか持たなかった私の考え方が一変したのは、当館に赴任したのち、3年前の真夏に京都を訪問した際のことであつた。

講演会の準備をしながら御所近辺の地図を見つめなおすと、京都守護職・松平容保の陣所があつた黒谷金戒光明寺から御所外門の要である清和院御門まで、ほぼ真西に進めばすぐにたどり着きそうな位置にあることが分かつた。元々、京都所司代邸が緊急の場合に備えて御所や二条城に近い位置に置かれていたことは把握していたため、守護職の陣所と同じ仕組みで置かれたのではと思つたのである。しかし、所司代邸から二条城や御所まで歩いたことがそもそもなく、果たしてどれくらい近いのか全くわからなかつたため、それならば歩いてみようとう京都を訪れた。真夏をあえて選んだのは、池田屋事件の頃の酷暑を体験しようと思つたからである。

実際に歩いてみた結論としては、真夏に黒谷金戒光明寺から清和院御門まで歩くのは少々酷だといふことである。夏の京都は蒸し風呂状態であり、これに加えて松平容保は病弱であつた。体調万全で

挑んだ私がこの状態だというのは、体調がすぐれない青年がこの間を行き来するのはあまりにも大変なことだつたのではないかと考える。

さらに私の徒歩活動への熱を加速させたのは、一昨年に訪問した下関での火の山登山であつた。火の山は幕長戦争の際に龍馬も登っており、山頂から大砲を打つたことと知られている。そのころは麓から火の山の山頂へロープウェイ（2024年11月営業終了）が通っていたが、私が訪問した日は休みであつたため、山道をひたすらくねくねと登り山頂まで向かつた。登つた上での感想は、次は必ずロープウェイを使う、ただそれだけである。

しかし、京都の時と同様に、

実際に歩かないとわからないこともあつた。当然、ロープウェイは幕末期に開通しているわけもなく、龍馬も山道をひたすら登つて山頂へ向かつたのであろうが、軽装の私とは異なり、武士は裾の広い袴を着ているし、重い刀も身に着けている。歩きにくい恰好で足元の悪い山を登り下りしたと考えると、ひどく感心した。これは、昨年に湊川神社から神戸海軍操練所跡まで

歩いた際にも思つたことであるが、龍馬はおそらく足腰が丈夫であり、比較的健康だつたのだろう。そうでなくては、あれほどまでに各地を渡り歩いて活動していくことはできない。

道を歩けばその町の風景をよく知ることができる。しかしそれだけではない。昔の偉人たちが歩いた道を辿ること、地図や史料には決して載ることのない事実を知ることができる。ぜひ、自称・史跡徒歩家となつて、かつてそこを歩いた人々の姿に想いを馳せてみてほしい。



ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。

今回は4月より新学期、新社会人としての一歩が始まる方にも、ぜひご注目いただきたい商品です。貰ってもうれしいアイテムが数多くある中、こちらの人気商品上位2点に注目。

いくつあっても役に立つご当地ならではの商品、オリジナルタオルハンカチとTシャツのご紹介です。

お土産にも最適!“タオルハンカチ”

今治タオルと言えば、今や知る人ぞ知る人気タオルの一つではないでしょうか。

その基準は大変厳しく、今治タオル工業組合が定めた独自の品質基準をクリアした高品質タオル商品です。

本製品の糸は高級綿の代名詞であるアメリカ産超長繊維綿のピマコットンを使用し、独自の紡績方法で仕上げています。そのため毛羽がきわめて少なくシルクのような光沢と滑らかさがあるものとなりました。

また、通常の綿糸と比べて糸の断面は丸くなっており、そのふくらみにより独特のハリ・コシが生まれ、タオルの柔らかい風合いを保ちつつ、長期間使用していただけます。

記念館ならではの坂本龍馬にちなんだロゴを駆使

し、どなたでもお使いいただけるようホワイト・ピンク・ブルー系の柔らかな色合いで、サイズは約25cmの正方形と、たいへん使いやすい大きさです。

夏の暑い時期になると汗をぬぐうため、お買求め直後そのままご使用されるお客様も数多くいらっしゃいます。

何よりお土産にするには年齢を問わず、実用性も兼ねそろえた商品ですので、人気があるのは当然。ミュージアムショップならではのお勧めアイテムです!!



620円(税込)

“刺繍Tシャツ”

こちらのTシャツも当館人気商品の一つです。タオルハンカチと同じように実際龍馬が書いた名前の刺繍を入れ、坂本家の家紋である“組合角に桔梗紋”を胸元に記したTシャツは普段使いとしても着こなせる白と黒のシンプルな二種類。

男女問わずM・L・XLのサイズ展開があり生地はベトナム産、他の加工は日本で施された商品です。左右両肩ラインから首後ろまでテープ処理をしてあることで型くずれを防ぎ、洗い替えに何枚あっても最適なTシャツとなっております。



2,700円(税込)

まだまだショップでは色々な商品を取り揃えておりますが、今後価格変動や数に限りのある品もございます。

他にも貰ってうれしいアイテムを揃え、今後新商品の提案もして参りますので、どうぞお楽しみに!!

西川 知佐

■「海見える・ぎやうりい」

「海見える・ぎやうりい」では、不定期で過去の企画展等で作成したパネルを展示しています。2月21日（土）からの「第3回 歴史の面白さを学ぼう！」に合わせて、小学生を対象として、龍馬の生涯を学べるパネルを展示しました。新館の常設展示室の内容は少し難しいという児童の皆さんにも、龍馬について知っていただくよい機会になったのではないかと思います。

展示したのは、以前に当館が作成していた紙芝居「坂本龍馬ものがたり」をパネルにしたものです。乙女姉さんとの剣術の稽古から始まり、脱藩・薩長同盟などを経て、「龍馬のさいご」まで、龍馬の生涯をダイジェストで知っていただけるものです。

紙芝居をパネルに仕立てるにあたり、紙芝居では「船中八策」と題していたページは、「新政府綱領八策」のページに改めました。慶応3年（1867）6月に長崎から上方へ向かう船上で龍馬が提示したとされてきた「船中八策」は、それを書き留めたとされる長岡謙吉筆の原本が確認されていません。この点に関しては2010年代の研究により、明治期に創作されたものであったとする見解が有力視されてもいます。龍馬直筆のものとしては、暗殺の直前である同年11月に、新政府設立に向けた施策提言である「新政府綱領八策」の存在が確認されており、こちらを紹介するページに修正したのです。このように最新の研究成果を取り入れつつ、より正確で分かりやすい情報を幅広い年代の方々に伝えていくことは、博物館の大事な使命の一つです。

「新政府綱領八策」の紹介文の最後は、「多くの人に出会い、その意見を聞き、自分の考えをいれて、（新政府綱領八策を）まとめあげていくのです。」とあります。多くの人との出会い→様々な考えの吸収→自らの考えの構築という龍馬の真骨頂は、「新政府綱領八策」を押し出しても不変であろうと思います。

安岡 達仁



入館状況

2026年3月20日現在

（1991年11月15日開館以来 34年126日）

◆入館者数 4,866,449人

■リニューアルオープン（2018年4月21日）以来 929,689人

編集後記

2月末日、香美市土佐山田町の谷秦山墓所を訪れました。土佐南学の大学者で、谷干城の先祖にあたる江戸時代中期の人物です。個人的な心願を胸に墓参しましたが、墓の傍では多くの人々が願をかけた小旗がはためいていました。皆さんの願いが成就し、晴れやかな新年度の幕開けであることを願うばかりです。

次回企画展は武士の「名前」に焦点を当てます。少しニッチかもしれませんが、龍馬が生きた江戸時代の武家社会を、新たな視点から眺めていただけるのではないかと思います。ご期待ください。（や）

館だより“飛 騰”第137号（年4回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00～17:00 年中無休

入館料 一般 500円（企画展開催時 900円）

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は140円切手をご希望回数（4回分まで）お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで